うらさぶる　情(こころ)さまねし　ひさかたの　天(あめ)のしぐれの　流らふ見れば

長田王（巻一の八二）

世間(よのなか)を　憂(う)しとやさしと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば

山上憶良（巻五の八九三）

玉津島　磯の浦廻(うらみ)の　真砂(まなご)にも　にほひて行かな　妹(いも)が触れけむ

柿本人麻呂の歌集（巻九の一七九九）

上野(かみつけの)　安蘇(あそ)の真麻群(まそむら)　かき抱(むだ)き　寝(ぬ)れど飽かぬを　何(あ)どか吾(あ)がせむ

（巻一四の三四〇四）

たまきはる　宇智の大野(おほの)に　馬並(な)めて　朝踏ますらむ　その草深野(くさふかの)

間人連老（巻一の四）

東(ひむがし)の　野に炎(かぎろひ)の　立つ見えて　かへり見すれば　月傾(かたぶ)きぬ

柿本人麻呂（巻一の四八）

采女(うねめ)の　袖吹きかへす　明日香風　都を遠み　いたづらに吹く

志貴皇子（巻一の五一）

小竹(ささ)の葉は　み山もさやに　乱(さや)げども　われは妹思ふ　別れ来(き)ぬれば

柿本人麻呂（巻二の一三三）

山振(やまぶき)の　立ち儀(よそ)ひたる　山清水　酌みに行かめど　道の知らなく

高市皇子（巻二の一五八）

矢釣山(やつりやま)　木立も見えず　降りまがふ　雪のさわける　朝楽(あしたたのし)も

柿本人麻呂（巻三の二六二）

君待つと　わが恋ひをれば　わが屋戸の　すだれ動かし　秋の風吹く

額田王（巻四の四八八）

み空行く　月の光に　ただ一目　あひ見し人の　夢(いめ)にし見ゆる

安都扉娘子（巻四の七一〇）

神(かむ)さぶと　否(いな)とにはあらね　はたやはた　かくして後(のち)に　さぶしけむかも

紀郎女（巻四の七六二）

わが園に　梅の花散る　ひさかたの　天(あめ)より雪の　流れ来るかも

大伴旅人（巻五の八二二）

士やも　空しくあるべき　万代に　語り続くべき　名は立てずして

山上憶良（巻六の九七八）

海原の　道遠みかも　月読の　光すくなき　夜は更けにつつ

（巻七の一〇七五）

秋萩の　散りのまがひに　呼び立てて　鳴くなる鹿の　声の遥けさ

湯原王（巻八の一五五〇）

ひさかたの　月夜を清み　梅の花　心開けて　わが思へる君

湯原王（巻八の一六六一）

秋風に　山吹の瀬の　響るなへに　天雲翔ける　雁に逢へるかも

柿本人麻呂の歌集（巻九の一七〇〇）

風に散る　花橘を　袖に受けて　君が御跡と　思ひつるかも

（巻一〇の一九六六）

天の川　水陰草の　秋風に　なびかふ見れば　時は来にけり

柿本人麻呂の歌集（巻一〇の二〇一三）

沫雪は　千重に降り敷け　恋しくの　日長きわれは　見つつ偲はむ

柿本人麻呂の歌集（巻一〇の二三三四）

難波人　葦火焚く屋の　煤してあれど　己が妻こそ　常めずらしき

（巻一一の二六五一）

うつせみの　常の言葉と　思へども　継ぎてし聞けば　心はまとふ

（巻一二の二九六一）

斎串立て　神酒坐す奉る　神主部の　うずの玉陰　見れば羨しも

（巻一三の三二二九）

吾が恋は　まさかもかなし　草枕　多胡の入野の　奥もかなしも

（巻一四の三四〇三）

稲つけば　蟹る吾が手を　今夜もか　殿の若子が　取りて嘆かむ

（巻一四の三四五九）

竹敷の　玉藻靡かし　漕ぎ出なむ　君が御船を　何時とか待たむ

玉槻（巻一五の三七〇五）

君が行く　道のながてを　繰り畳ね　焼き亡ぼさむ　天の火もがも

狭野茅上娘子（巻一五の三七二四）

家にても　たゆたふ命　波の上に　思ひし居れば　奥処知らずも

謙徒（巻一七の三八九六）

世間は　数なきものか　春花の　散りの乱ひに　死ぬべき思へば

大伴家持（巻一七の三九六三）

立山の　雪し消らしも　延槻の　川の渡瀬　鎧浸かすも

大伴家持（巻一七の四〇二四）

珠洲の海に　朝びらきして　漕ぎ来れば　長浜の浦に　月照りにけり

大伴家持（巻一七の四〇二九）

天皇の　御代栄えむと　東なる　陸奥山に　黄金花咲く

大伴家持（巻一八の四〇九七）

朝床に　聞けば遥けし　射水川　朝漕ぎしつつ　歌ふ船人

大伴家持（巻一九の四一五〇）

うららうらに　照れる春日に　雲雀あがり　心悲しも　独りし思へば

大伴家持（巻一九の四二九二）

吾ろ旅は　旅と思ほど　家にして　子持ち痩すらむ　わが妻かなしも

玉作部広目（巻二〇の四三四三）

韓衣　裾に取りつき　泣く子らを　置きてそ来のや　母なしにして

他田舎人大島（巻二〇の四四〇一）

咲く花は　移ろふ時あり　あしひきの　山菅の根し　長くはありけり

大伴家持（巻二〇の四四八四）

新しき　年の始の　初春の　今日降る雪の　いや重け吉事

大伴家持（巻二〇の四五一六）